
使い魔王と王の剣

した

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

使い魔王と王の剣

【Nコード】

N7858Y

【作者名】

した

【あらすじ】

古代の大鷲が語ったのはこの国と魔王の昔話。
そしてこれからの伝説。

赤い石（前書き）

「この国の昔話をしよう。」

王城前の噴水広場で、老人が語りだした。

話し始めたのはこの国の建国と魔王討伐の歴史。
この連合王国の昔話。

赤い石

同じ頃、噴水広場の北、赤の国を囲む大鉾山の一角で王子は岩を掘っていた。

齢17、赤い髪と赤い瞳をもつ、この赤の国の正統後継者その人である。

王子は額から汗を流し、一人で岩を砕き崩していく。この穴はほとんど一人で掘り進めたものだ。目当てのものをを見つけるために。

一際大きな岩を砕いたその時、それは姿を表した。

大ぶりの鶴嘴を投げ捨て、小型のものでその周りを慎重に崩す。目当てのその石が全貌をあらわした。

大事そうに大事そうにそれを両手で掴む。

「オレーヴ！」

穴の入口、光が差す方から声がした。

逆光になっているのは恰幅のいい男。

オレーヴと呼ばれたその人の手元、大事そうに握られているその石を見て感嘆と喜びの声をあげた。

「ついに見つけたか！それにしてもこれまた大きいものだな。」

「ああ、前見つけたものでは不足かと。」

手の中の石はそのままに、オレーヴと呼ばれた男は答えた。

「あれも十分すぎるだろう。」

「いや、ナチュムの王位継承にはこのくらいのお祝いが相応しい。」

「しっかし間に合うか？ナチュム様の戴冠式まで後三日だろう。」

「加工はこの前の石で大分身についた。睡眠時間を削れば問題無いさ。」

「戴冠式の貴賓席で眠りこけてるようだったら、俺が死ぬまで語り継いでやるさ、オレーヴ殿？」

「勘弁してくれ。」

先ほど掘り出したその石を光の差す方へとかざす。
掘り出したその石は熱い血のように、その石を持つ男の瞳のように、
赤く、赤く輝いていた。

この国は昔、4つの髪と瞳の色を持つ部族が争いを繰り返す大地
であった。

赤の国は素晴らしい鉱山を持ち、富に溢れ

緑の国は名のとおり自然に恵まれ

黄の国は商才に優れた人々が生き、貧しい土地ながら文明に優れ

青の国は技術に秀で、魔術を得意とした

それぞれの国はそれぞれの持ちうる全てのものを賭けて、全ての国
を手に入れようとしていた。

4国の争いは冷戦と激戦を繰り返す、何十年と続いていた。

そんな中、遙遠く西の大地に、魔物とそれを統べる凶悪な魔王が現
れたという噂が流れてきた。

西の氷の大地に現れた魔王は通る国、村、街を荒し北西の洞窟に根
城を築いたという。

その噂を聞いた4部族は、魔王討伐を決意した。

領地争いを一時休戦とし、4つの部族からそれぞれ一名ずつ4人の
若者を選出、魔王討伐へと旅立たせた。

武術に優れた赤の国の若者

癒やしの歌を歌う緑の国の少女

魔術での援護をした青の国の青年

旅の管理、計画の全てを取り持った黄の国の少年

4人は各地の魔物を討伐し、魔王の巢食う洞窟まで辿り着いた。

魔王は強かったが、長い長い戦いの末、赤の国の若者の剣が魔王の
心臓を一突きし、見事魔王を打ち倒した。

4人の勇士は無事母国に帰り、協力して魔王を倒した4人を称え、
4つの国は一つへと統一された。

「その時の4人の勇士の子孫が今の王家の人々なんじゃよ。」
いつの間にか噴水の前に集まっていた子供たちも、まどろみと共にその話を聞き流している。
もう何度と聞いている話だ。

「遠き地まで赴いた4人は、旅した異国の文化を国に取り入れて、この連合王国に更なる発展を…」

「その辺りにしてやりなよおじじ。みんな聞き飽きたって顔をしている。」

おおじじと呼ばれた広場の老人が振り返る。

噴水の斜め後ろ、一人の王子がそこにいた。

その姿は王子と呼ぶには相応しく無い砂埃を被った姿で、手の内には確かにあの赤い石。

「おや、オレーヴ、来ていたのか。」

「俺も父もおおじじから何度もその話を聞いている。耳にタコができたぞ。」

「そうかそうか。いやしかし、そんな土だらけの格好で一体…」

「オレーヴ様！」

二人の会話を割って入るように男性の大声が響く。

「フェ、フェイ！」

フェイと呼ばれた男は赤の国に仕える執事だ。

その役目はバトラーに近い。

胸元に赤の国を表す剣の刺繍のある燕尾服を揺らしながら早歩きでオレーヴに近づく。

その表情には鬼気迫るものが確かにあった。

「また山へ入ったのですか！この間『しばらくは行かない』と申されたではありませんか！！」

「す、すまない…」

フェイの気迫に押されてオレーヴが一步引く。

「全く、最近のオレーヴ様は流石に活動的すぎますぞ。私がどれだ

「心配していると思っておいでですか!」

「分かった分かった。ナチュムの戴冠式が終わったら当分は大人しくしているさ。」

「当分って、どうせしばらくしたらまた鉱夫に混ざって山へ行くでしょう!」

「本当に当分は行かない。読書でもしているから。」

「本当ですか?」

「本当だから。その顔はやめろ。」

依然として表情を変えないフェイをオレーヴが止める。

おおじじが続く。

「フェイ、いささか最近気の短さが増しておるように思うのじゃが。」

「おおじじ! オレーヴ様が山へ入って大怪我でもしたらどうするのです!」

「この年の若者などみなこのくらい活発というものじゃろう。かくいうお前も十代の中頃など...」

「あー! もうその話は良いのです! オレーヴ様! 城に戻りますぞ!」

「!」

「なんの話进行い出したか、おおじじに反論できないまま、オレーヴに向かつて帰宅を促した。」

「オレーヴは大人しくそれに従う。」

「反抗など無駄なのだ。この忠誠心の塊に対しては。」

「ということでおおじじ、私は家に戻るよ。年なんだからあんまり外に長居はするなよ。」

「ありがとう、オレーヴ。良いものが作れるとよいな。」

「赤い石に確かに気付いていたおおじじは一言付け足した。」

「ああ、戴冠式が楽しみだ。」

「城といっても、さほど豪華なものではない。」

「民主化を進めてきたこの連合国は王政とは呼びがたい。」

実質対外交渉と国内の争いの平定、その他雑務を主な仕事とする王の権威は大きくはない。

故に城とは名ばかりの歴史ある邸宅、それがオレーヴの家である。勇士の子孫4色の王はみな、これ以上の権力を望んではない。

元々自分の手柄ではなく、先祖の栄光の恩恵を受けている甘ったれとさえ考えている王族さえいる。

そのような意識があつてからか、山へ入り鉱石を掘り、民と共に畑を耕し、商業に従事し、技術の向上を目指す。

現在における王族は、一国民であることを望み、国民の代表者である。

ただ、赤の国の家臣フェイ・ウオツツその人は、あまりに活動的すぎるオレーヴの行動に神経をすり減らしていた。

「怪我：まして死傷など負ったらどうするのです。」

「最悪死んだらサゲインが立派に王位を継いでくれるさ。あいつはよっぽど私より頭が良い。」

「そういう事ではありません！オレーヴ様もサゲイン様も王位を継げばそれは立派に国を守ってくれるでしょう！しかしそれとこれとは別です！」

フェイの説教は当分おさまりそうにない。

廊下、もしかしたら家じゅうにその声は響いている。

二人の…どちらかといえばフェイの声を聞いて廊下の突き当たりにある一際大きな扉が開いた。

「どうしたフェイ、そんな大声を出して。」

「王！あなた様からもオレーヴ様に言つて下さい！また鉱山に行つたのですぞ！さらに私に無断で！！」

王と呼ばれたその男はため息まじりに笑った。

「『また』ということはもう分かつているだろう？オレーヴが聞き入れないことを。」

そこには諦めというより息子を信頼している笑いがある。

その笑いに根負けしてフェイは不満げに口をつぐんだ。

フエイがこれ以上話すことは無さそうだと判断すると父は息子に話しかける。

「オレーヴ、調子はどうだ？」

「これを。」

オレーヴは右手を差し出す。

その手には確かに赤い石。

赤く輝く石は通常この国の鉾山で取れるそれと比べると規格外に大きい。

「やはり献上品はお前に任せて正解だったな。一級品に仕上げるところを期待するよ。」

「確かに、父さん。」

一呼吸を置くと、父は続けた。

「さて、その戴冠式の時の礼服が届いている。風呂で泥を落としたあと試着なさい。」

赤い石（後書き）

一話で投稿しようとしてたんですけど長すぎるので3つくらいに分けます。

王と友人（前書き）

時代とともに重厚さを増した、ニス光沢のドアを開ける。
重い音とともに応接室には見慣れた人影があつた。

「スティ、来てたのか。」

「ああ、後こいつも。」

「よっ。泥臭いのは取れたか？」

王と友人

応接室に入るとまず目に入ったのは人型模型に着せられた豪華な服。そしてその前で肩の位置を調節している青の国の王族の長兄ステイナス・クライスン。あだ名はステイ。

品よく切りそろえられた青い髪と優しそうな同色の瞳を持つ。

さらにそのステイナスが指さしたソファでくつろいでいるのが黄色の瞳と、男にしては長めの髪を後ろで一つにまとめている青年。

黄の国の王子ディー・ヴィラーヴだった。

「ちゃんと風呂に行ってきたよ。どうせまた寝るまでに汚れるけどな。」

「また山に行くのか？」

「ディーも廊下での話を聞いていただくろう。オルはこれから加工だよ。」

オル、とはオレーヴの事だ。

フェイはもちろん他の多くの国民にもオレーヴと呼ばれる彼をオルとあだ名で呼ぶのは年の近いこの二人くらいである。

ステイの最もな指摘にディーは納得、という表情を浮かべた。

話が一段落した所でオレーヴが本題の話題を振る。

「で、これが私の？」

「ああ。うちの新しい機械で作ったんだ。」

「糸を仕入れたのは俺だぜ。西方のとびつきり上質なものを。」

ステイナスの父が治める青の国は現在、工業を中心とした産業が発達している。

魔法、魔術の技術が高かった青の国は技術力に優れ、4国の最先端を行く技術を開発している。

紡績機や縫製機もこの国の発明だ。

その青の国をおさめる予定のステイナスは自身も手先が器用で今で

は珍しい魔術・魔法も扱うことができる。
二つ年下、デイーと同一年の婚約者がおり、結婚は秒読みとの噂もあり、将来は安泰だといわれている。

一方、変わらず商業に優れていた黄の国は少ない資源しかない土地にも関わらず対外貿易で大きな利益を上げ続けている。

中でもデイーは若干19歳でありながら父とは独立して仕事を任されるほどの実力を持っている。

現在、唯一王位継承権をもつデイーは実力も相まって国内外から期待されている男だった。

「これは…本当に素晴らしいな。」

オレーヴが衣装をよくよく見てため息にも似た感嘆の声をあげる。

先ほどステイナスが肩の位置を調節していた服。

オレーヴの髪と瞳の色よりすこし濃い赤を貴重とした衣装で、金の刺繍と各国を表す四色が使われたエンブレムが左胸のあたりを鮮やかに飾る。

式典などで王侯貴族が用いる礼服ではあるが、新調されたのには理由があった。

オレーヴに衣装合せをしながらステイナスはその理由をつぶやく。

「ナチュムにはここ数日見てないな。今日あたり行ってみようか？」

「やめておけ。直前準備で大慌てだろうさ。」

「俺の妹の嫁入り時だってあんなに大騒ぎだったんだ。戴冠式なんてもっと大騒ぎに決まってる。」

そう、先ほどから名前の出ているナチュム、フルネームでナチュム・アフェイルという少女は現時点で緑の国の姫である。

ただ、三日後には病死した父に代わり正式に緑の国の王女となる。

国を齡16歳の少女が背負うこと、あまりにも早すぎる王の死により引継ぎが不十分なことなども合わさり、ただでさえ大きな王位継承という行事の準備ががいつそう慌ただしく行われていた。

「じゃあ会えるのは戴冠式だな。」

「献上品は満足いくできになりそうか？」

「ああ、上質な素材は見つけたから、後は加工だな。もしかしたらステイのとこの工房を借りるかもしれない。」

「お好きにどうぞ。今はみんな仕事に手がついてないからね。」

あの赤い鉱石をナチュムに献上する、というのがオレーヴが任せられた大きな仕事だ。

自分で採掘に向かったのは彼の独断であったが。

「そういや、うちの妹君も戴冠式には絶対来るってさ。」

「フィーネか。元気にしてるか？」

「ありあまるほどに。手紙の筆跡だけで伝わってくるさ。」

デイーの妹フィーネはナチュムと同じ年で半年ほど前に隣国の貴族の元へ嫁いだ。

純粋な恋愛結婚であったが、相手がヴィラーヴ家の有力な貿易相手であったために両家の繁栄に大いに貢献する結果となった。

ナチュムとはとても仲が良いので、必ず来ると言い張るのも納得がいく。

「さて、こんなもんでどうかな。」

最終的な着付けを終わらせたステイナスがオレーヴの肩を叩いた。誘導されるがままに壁にかかっている姿見の前へと移動する。

「似合ってるじゃん。」

「ピツタリだよ。」

「そりやどうも。ここまで着こなしてもらえるとこっちも嬉しいね。」

三者三様の意見を述べる。

当日中に着るシャツは更に豪華なものになる予定だが、上着だけでもその完成度は素晴らしかった。

仕立てたステイナス自身もご満悦の様子で口元を綻ばせている。

「さて、汚してしまう前に脱ごうかな。」

「早いな。折角だからフェイあたりに見せればいいのに。」

「面倒くさいよ。それに当日の楽しみが減るだろう？」

「なるほどね。」

オレーヴはてきぱきとその豪華な衣装を脱いで元のYシャツ姿に戻った。

それだけで王子の風体から17歳の少年に姿を変えた。

デイーが切り出す。

「夜はどうする？」

「加工で徹夜だから私は無理だな。」

「僕もサイアとラジューに合成の魔法を教える約束をしてるんだ。」

「二人とも忙しいのか。にしてもまだステイのこの双子は魔術の真似事か。」

「まあ確かに真似事かもしれないけど本人達はいたって真剣だよ。」

「そうかい。」

ステイナスの双子の妹弟サイアールとラジューは近代では廃れ気味の魔術を得意とする兄に憧れて日々鍛錬に励んでいる。

がうまくいかない。

「で、デイーはまたうちの酒場に？」

「あ、バレた？」

「最近私やステイを外出に誘う時といたらリリイに会いに行く時くらいだろう。」

リリイというのはオレーヴの父、赤の国が有する領地の中心部、オレーヴの家から5分ほどにある酒場『ニキオ』の看板娘だ。

快活な性格とその美しさに一目惚れしたデイーはことあるごとにオレーヴやステイナスを誘っては酒場に通っていた。

「そうだっけ？まあ仕方ない。今日も一人で行くとするか。」

「ニキオの親父は怖くないのか？」

ニキオの親父とはは店名の通り酒屋の店主で、本名もそのままニキオである。

つまりリリーの父親だ。

大工仕事や狩猟をして暮らしていてもおかしくない、というほど筋骨隆々で性格は豪胆。

十代のリリーが夜店で仕事を手伝っても悪い虫が付かないのはこの父親の力のおかげだ。

「まあ怖いけど…」『そのようなことでくじけていては真実の愛は手に入れることなど不可能だ!』

古代の戦士の恋愛を描いた小説の言葉をそっくりそのまま真似てデイーは力強く言い放った。

小説の中では戦士が国の姫と恋に落ち、結婚に猛反対する王から送られる刺客を倒して言った一言である。

実際デイーにとって、ニキオの親父は手ごわい相手に他ならなかった。

王と友人（後書き）

次はちょっと間が空きそうです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7858y/>

使い魔王と王の剣

2011年11月23日13時45分発行